

基本的な考え方

(1) 避難訓練のねらい

避難訓練には、次の**3つのねらい**があります。

- ①子どもが避難の仕方を覚える
- ②教職員が避難の仕方を確認する
- ③管理職が的確な指示を出して教職員と子どもを動かす

(2) 火災が発生する場所

校内で火災が発生する可能性がある場所（意図的な引火ではない）は、「給食室」「家庭科室」「理科室」の3か所です。
※給食の子学校の場合、給食室を除く2か所です。

教職員の危機管理能力を高めていきます



指示を出すのは誰か？

放送で指示を出すのは、教務主任ではなく**管理職**です。



成果と課題を直ちに取
りまとめて
改善する

実効性を高める手立て

避難訓練は、主に①地震 ②火災 ③地震による火災 ④地震による津波 ⑤台風等による河川の氾濫や土砂災害 ⑥不審者侵入の6つの想定が考えられます。（学校の設置場所によっては④⑤は無い）

本校では、避難訓練を所管するのは、**学校安全防災委員会**（特別委員会）。指導部（行事部や学級活動部）が所管していると、ねらいは「子どもにとっての避難訓練」のみになってしまい、成果と課題の取りまとめも遅くなる。

こんなものはいらない

- 本部の旗**はいらない。教務主任が立っている場所が本部である。
- 担任から本部の教務主任への報告は「○年○組全員います。」でよい。「**男子○名、女子○名…**」はいらない。

指導の重点 緊急事態が発生した場合、放送での指示が重要である。①放送を**聞く**②『おはしも』（おさない・はしらない・しゃべらない・もどらない）を守るの2つを指導の重点とする。

- すべての避難訓練を「(子どもへの) **予告無し**」で実施する。
- 教頭は、放送での指示や関係機関との連絡などで職員室に留まっている時間が必要なので、グラウンドの**本部設置は教務主任**が担当する。
- 地震による避難場所は、グラウンドではなく体育館とする。〔避難ではなく安否確認のために集まる〕
※胆振東部地震で校舎が倒壊しないことは実証済みである。
- 夏期間は「低学年優先」、冬期間は「高学年優先」で避難する。
〔理由〕外は気温が低く、グラウンドの雪を踏み固めて避難場所を作ることも想定されるため、低学年より高学年が先にグラウンドに出た方がよい。
- 階段は、内回り・外回りで2学年同時に降りる。
- 火災による避難訓練の場合は、防火扉を閉め、防火戸を通過する訓練も取り入れる。
- 教頭（校長）が校内放送で伝える情報を対象者に応じて区別して伝える。〔教職員向けの連絡、子どもへの指示、全員への一斉避難指示〕
- 休み時間の避難訓練で、教職員の配置を決めない。（日常は、教職員がどこにいるかわからないため）
- 冬期間の避難訓練は、予め防寒具を身に付けたり、教室に外靴を持って来ておいたりしない。

基本的な考え方

(1) 教職員の配置

普段の休み時間は、それぞれの教職員がどこにいるかは決まっていないので、予め教職員の配置を決めておくようなことはしません。

避難することを決めた段階で、各階や体育館・グラウンドに教職員がいる状態をつくり出せばよいのです。(必要に応じて指示する)

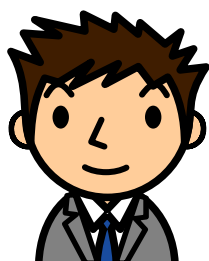
(2) グラウンドに緊急放送が流れないことへの対応

グラウンドにいる子どもは、**すでに一次避難している**と捉え、校内放送で伝わらず時差が生まれてもよいのです。

訓練じゃなくても実施できる仕組みをつくる



校内放送で指示を出すのは、**管理職**です。グラウンドへの指示は、校内放送で指示している管理職とは**別の教員**(教務主任等)です。



成果と課題を直に取りまとめて改善する

3段階で避難誘導する

次の3段階で、子どもたちをグラウンドへ避難誘導します。

〔第1段階〕子どもたちを座らせる

緊急放送設備を使って、サイレンを流し、「その場に座って放送の指示を聞きなさい。」と指示します。教職員は、サイレンが鳴った時にいた場所で子どもの把握に努めます。

同じ場所に複数の教職員がいる場合は、お互いに声を掛け合って対応したり、教職員が不在の場所を見つけて移動したりします。

グラウンド(サイレンが鳴らない)で遊んでいる子どもたちへは、担任外教諭がメガフォンを使って「遊びを止めて、その場に座りなさい。」と指示します。玄関を出てグラウンドに向かって歩いている子どもたちにも指示します。

〔第2段階〕子どもを掌握する

同じ階にいる子どもたちを廊下に学年関係なく2列に並ばせます。体育館にいる教職員は、子どもたちを体育館中央に集め、同じように2列に並ばせます。

グラウンドにいる子どもたち(玄関を出てグラウンドに向かって歩いている子どもを含む)を**グラウンド中央**に集めて座らせます。(教員を中心として周りに座らせる)



〔第3段階〕子どもを誘導する

校舎内の子どもたちをグラウンドへ誘導し、各学年・学級ごとに並ばせます。

校舎内から子どもたちが出てきて本部の場所に並び始めた段階(各学年・学級の並ぶ場所がはっきりした段階)で、グラウンド中央で待機していた子どもたちを学年の場所へ並ぶように指示します。

※「**歩いて移動する**」ことを徹底させます。子どもは「走る」と声が出るので、「歩く」ことが「しゃべらない」ことにつながります。

第2段階で検索する

〔第2段階〕で教職員がそれぞれの場所で検索を実施し、グラウンドへ避難した後、全員が避難完了しているのであれば改めて検索は実施しない。

実効性を高める手立て

子どもたちは、普段、校舎内では外套等の防寒具を脱いで生活しています。火災発生や爆破予告等で校舎外へ避難しなければならないときは、防寒具を身に付けて避難します。訓練ではなく実際に校舎外に避難した場合、短時間で校舎内に戻ることができるとは考えにくいので、火災等の状況にもよりますが、時間がかかっても防寒具をしっかり身に付けてから避難することが大切です。

降雪量が多い翌日に避難訓練を行うことも…



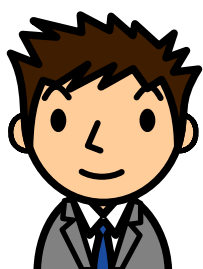
○事前に防寒具を身に付けたり、教室に外靴を持って来たりしない。

※校内放送の「避難開始」の合図で、防寒具を身に付けて避難する。

○前日までの天候によってグラウンドの積雪量が多く、外靴が埋まる状況が発生したときは、避難場所の積雪を踏み固めて「避難しやすい状況」にする必要がある。

事前準備は行わない

積雪時の避難経路は、積雪量によって通れない経路も考えられます。訓練に向け、特別に避難経路の除雪をしておくようなことをしてはいけません。



積雪時だからこそ配慮すべきことがあります

積雪時の避難における配慮

災害時の校舎外への避難は、長時間に及ぶ可能性が高いので、次の配慮が必要です。

○冬期間は、「低学年優先」ではなく、体が大きく体力がある「**高学年優先**」での避難とする。

※「避難開始」の指示を合図に、防寒具を着用することになるが、低学年より高学年の方が早く準備することができるので、必然的に「高学年優先」になる。

○グラウンドの状況によっては、先に避難した高学年の子どもたちが、グラウンドの**積雪を踏み固めて**、避難場所を作る。

※横一列になって前進して踏み固める行動を繰り返す。

○**短靴の子ども**は、積雪量が多いグラウンドに入る手前で待機し、雪が踏み固められた後で各学級の列に並ぶ。(短靴の中に雪が入ったら足が凍えて耐えられなくなる。)

避難訓練後の配慮事項

万が一、短靴の中が濡れてしまった場合、その濡れた短靴を乾かす場所を用意しておきます。玄関に近い特別教室または廊下に青シートを敷き、暖房を入れて短靴を乾かすことができるようにしておきます。

あらかじめ想定しておくこと

避難訓練では実施しませんが、実際に避難したときは、1次避難のグラウンドから**2次避難場所**(美しが丘小等)への移動が想定されます。

○積雪時の2次避難場所を決めておく。

○2次避難場所までの誘導経路を決めておく。

○2次避難場所からの下校体制(保護者引き渡し)の具体的な実施方法を想定しておく。

2次避難が必要となる可能性が高いです



短時間で校舎内に戻ることは考えられないため、温かい場所への避難が必要です。

基本的な考え方

火災発生と不審者侵入の場合、校内放送で避難の指示を出す前に、事象（火災や不審者）へ対応する動きが行われているはず。そこで、避難訓練を開始する前（10分間程度）に、次の点を明確にするためのシミュレーションを行い、実効性を高めます。

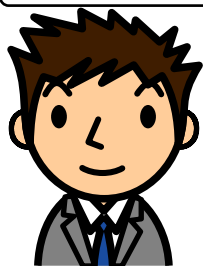
- 校内放送で避難の指示を出す前に、どのような動きが想定されるか。
- 管理職は、教職員をどのように動かすとよいか。
- どの時点で「避難する」という判断を下せばよいのか。
- 119番（110番）通報は、どのタイミングで誰が行えばよいのか。

想定外を想定内にするための取組です



指示を出すのは誰か？

避難訓練は、「教職員や管理職のため」というねらいもあります。**管理職がどのように指示するか**が重要です。



いかに想像力を働かせるかが重要です

現場での動きをシミュレーションする

「子どもの安全確保」「事象（火災や不審者）への対応」「警察や消防への連絡及び現場への誘導」が必要です。

(1) 火災の場合の担任が行う初期対応

校内で火災が発生する可能性が高い場所は、家庭科室・理科教室です。（本校は、給食の子学校なので給食室が無い。）学習活動中に火災が発生したとき、担任は次の3つを同時に行います。

- 子どもを火元から遠ざける。（教室から出す）
- 担任は、消火器を使って火を消す。
- 子どもを使って職員室へ「火災発生」を伝える。

(2) 現場に駆け付けた管理職・担任外教諭等の対応

想像力を働かせて、現場で起こることを考え、どのような順番で動くかをやってみます。管理職は、その場にいる職員の人数に応じて「だれに・どのような」指示を出せばよいのかを考える必要があります。

110番通報する際の留意点

110番通報をすると、不審者に関わる情報（身長、体格、服装、所持品等）を聞かれるので、不審者が見える場所で携帯電話を使って通報します。
※事前連絡した上で通報の練習をすることができます。

- 警察官や消防署員を**現場へ誘導**するために、玄関に職員1名を配置する。

- 子どもの安全確保**を図る（安全な場所へ誘導する）
※火災の場合は、同じ階の教室の子どもを別の場所（下の階など）へ移動させる。
- 事象**（火災や不審者）に対応する。
 - ・火が消えない場合…消火栓を使った消火活動
 - ・不審者の場合…「確保する」のではなく「一定の場所に留め置く」ようにする。
- 躊躇せずに担任外教諭に119番（110番）**通報**するように指示する。
- 校内放送で避難の指示を出す。

「正常性バイアス」とは何か？

心理学用語に「正常性バイアス」という言葉があります。自然災害や火事、事故、事件などといった自分にとって何らかの被害が想定される状況下であっても、**都合の悪い情報を無視したり**、「自分は大丈夫」「大したことはない」などと**過小評価したりする心の働き**のことです。

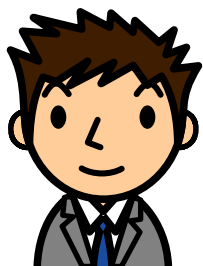
どの人間にも備わっている心の働きです



何か起こるたびに反応していたら精神的に疲れてしまうので、人間にはストレスを回避するために自然と脳が働き、心の平安を守る作用が備わっています。ところが、非常事態であるにもかかわらず、「正常性バイアス」によってその認識が妨げられ、危険にさらされる状況に陥ることもあり得ます。管理職が危機管理に関わる対応をする際に、「正常性バイアス」に支配されてはいけません。

正常性バイアスの危険性

自分にはそんな悪いことが起こるわけがないという気持ちから「正常性バイアス」は生じます。脳が「まだ大丈夫」とささやき、楽観的な方向に解釈しようとする傾向があるのです。



「正常性バイアス」が働いてしまった話です

イソップ物語「羊飼いとオオカミ」

イソップ物語の『羊飼いとオオカミ』の話で、羊飼いの少年に何度も「オオカミが来た。」と言われて惑わされた村人は、少年が本当にオオカミが現れて「オオカミが来た。」と言ったとき、「二度とだまされないぞ。」と対応せず、ついには本当の非常事態だとわからなくなり、羊はオオカミに食べられてしまいます。

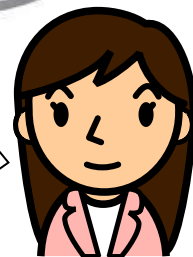
この物語の本来の目的は「うそをついてはいけない」ことを子どもに伝える童話なのですが、村人の「正常性バイアス」をうまく突いた戒めのような話でもあります。



「正常性バイアス」に打ち勝つ方法

心の在り方そのものが、更なる災害を生み出すことがないように、日頃から日常と非日常の切り替えに翻弄されず冷静に対応することが求められます。「正常性バイアス」に打ち勝つためには、万が一を想定し、訓練を積み重ねて経験値を高めるしかありません。**「想定外」を「想定内」として**対応の仕方を想定し、危機管理への対応が必要になったとき「正常性バイアス」に脳を支配されないように、本当に危険なのか、今何をすればよいのかを見極める**判断力**を養っておくことが大切です。

最悪の状態を想定できる力を高めることが…



危機管理能力を高める

- 同じ失敗を繰り返さないように原因をきちんと潰す。
- 最悪のパターンをイメージし対策を練っておく。
- 固定観念を捨て、自分の常識を疑う。

そのこと
によって

躊躇せずに 110 番や 119 番通報をしたり、即時・適切な指示を出したりすることができるようになります。

「地震発生」の避難訓練

地震発生の数秒前の「緊急地震速報」の着信または突然の地震発生から直ちに校内放送で指示を出すことが求められます。実際の地震発生時には、非常用放送設備ではなく、電話を活用して校内放送で伝えます。ただし、避難訓練の場合は、非常用放送設備を使って指示しています。

校舎内は安全な場所なので外に避難しません



(1) 授業中の場合

「校舎の中は安全である」ので、避難する必要はありませんが、「子どもたちの不安を取り除き、落ち着かせる」ことをねらいとして、全校児童を**体育館**に集合させます。

※グラウンドへの避難ではなく「体育館への集合」です。

- 机の下に入ったら、片方ずつの手で机の脚をつかみ、机が倒れないようにする。
- 揺れが収まるまで少し時間がかかることが想定されるので、机の下に留まっている時間を少し長くする。
- 校内放送で「緊急地震速報音」を流すことも考えられる。

(2) 休み時間の場合

子どもたちは、グラウンドや体育館、教室等にいるため、次のように対応して**体育館**に集めます。

【第1段階】子どもたちを座らせる

「その場に座って放送の指示を聞きなさい。」と指示する。

【第2段階】子どもたちを掌握する

それぞれの場所（グラウンド、体育館、各階の廊下）ごとに、子どもたちを集める。

【第3段階】子どもたちを誘導する

子どもたちを体育館へ誘導し、各学年・学級ごとに並ばせる。



しっかり防寒対策を講じることが大切です

冬期間の避難経路

積雪時にグラウンドに避難する場合、**防寒対策**として上靴ではなく**外靴に履き替える**必要があります。体育館や非常階段を使ってグラウンドへ移動する避難経路ではなく、玄関を通る避難経路になります。

上靴で外に出た子への対応

消防署からの「安全宣言」が出るまで校舎内に戻ることはできないので、長時間外に留まっていることが想定されます。状況によっては、教職員が玄関に置いてある外靴を取りに行くことも考えられます。

【玄関までの避難経路が通れない場合】

教室から玄関に行く間に火災発生場所（理科室、家庭科室、給食室）がある場合、迂回して玄関へ行くことになります。しかし、玄関まで行く経路が無く「非常階段」から直接外に出なければならない場合は、上靴のまま外に出ることになります。

【避難経路】①理科室から出火 ②家庭科室から出火 ③給食室から出火の夏季・冬季の避難経路を設定しておくことが必要です。

防火戸通過

防火扉を閉じて「防火戸」を通過して避難する訓練も考えられます。

- 防火戸を「押さえる人」を置く方法と、防火戸を押さえる役割をリレー形式で次の人に渡していく方法があります。
- 3階から階段を降りて来る子どもたちと、2階の防火戸を通過して階段を降りようとする子どもたちが交差するので、**高学年優先**で降りるようにします。

防災教育全体計画

| | | |
|---|--|--|
| <p><本校の児童の実態></p> <ul style="list-style-type: none"> ・思いやりがあり、仲間のよさを感じながら活動しようとする。 ・問題発見力や見通しをもって活動をつくり出す力は不十分である。 ・失敗や間違えることを恐れ、自ら進んで挑戦したがない。 <p><保護者の願い></p> <ul style="list-style-type: none"> ・心情を理解し、やさしい子 ・自ら進んで取り組む子 ・困難を乗り越える子 <p><教師の願い></p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題解決に向けて、見通しをもって自分なりに考えたり工夫したりする。 ・他者の思いを共感的に理解することができる。 | <p>本校の教育目標</p> <p>生きる力を大切にする子どもの育成</p> <p>○学び合いを楽しむ子【知】 ○ふれあいを豊かにする子【徳】 ○体を鍛え合う子【体】</p> | <p><教育関係法規></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育基本法・学校教育法など <p><現代社会の要請></p> <ul style="list-style-type: none"> ・豊かな人間性の育成 ・子どもたちの社会性の不足や自立の遅れ、倫理観の希薄さの問題 <p><学校教育の課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・生きる力の育成 ・「学ぶ力」の育成 ・社会に開かれた教育課程づくり <p><地域の特徴></p> <ul style="list-style-type: none"> ・新興住宅地として個人住宅所有の割合が高い。2世帯で暮らしている家庭は少なく、両親共に働いている家庭が多い ・保護者や地域が、本校の教育活動に対して協力的である。 |
| <p>学校づくりの重点目標</p> <p>つながりを大切にした教育活動 人とつながる・学びとつながる・心がつながる</p> | | |
| <p>防災教育の目標</p> <p>災害に関する正しい知識や対応方法を身に付け、非常時に冷静に判断し、臨機応変に自らの安全を確保できるような自助力の向上を図るとともに、非常時に進んで他の人や地域の力となれるような共助の精神や態度を育む。</p> | | |

| 推進の視点 | | |
|--|--|---|
| <p>【A】防災についての基本的な知識・技能を身に付ける</p> <ul style="list-style-type: none"> ・災害発生時に身を守る方法 ・災害発生時に自分で考え、適切に判断し行動できる実践力 ・災害を乗り越えるために、みんなで助け合う共生力 | <p>【B】人としての生き方・在り方に迫る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・命を尊重する心の育成 ・他者を思いやる心の育成 ・ボランティア活動に積極的に参加しようとする心の育成 | <p>【C】科学的理解を深める</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然災害の種類と発生のメカニズムについての理解 ・地域の災害の歴史と対策についての理解 ・今後の防災体制の理解 |

| 学年別の目標 | | |
|--|--|---|
| 低学年 | 中学年 | 高学年 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・災害発生時には、大人などの指示に従うなど適切な行動がとれる。 ・進んで家庭の手伝いなどをして、家族の役に立つことができる。 ・地域の災害に関心をもち、大地震や津波、風水害などへの備えが大切であることを理解する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・災害発生時には、大人などの指示に従うとともに、自らも安全な行動がとれる。 ・生命の尊さを感じ取るとともに、家族や友達などと助け合うことができる。 ・地域の災害の特性を理解するとともに、大地震や津波、風水害などへの備えについて理解する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・災害の危険を理解し、災害発生時には、自ら安全な行動がとれる。 ・自他の生命を尊重するとともに、周囲の人々と助け合い、地域に役立つことができる。 ・地域の大地震や津波、風水害などの災害発生メカニズムや防災について理解する。 |

| 関連する教科・領域 | | |
|---|--|--|
| <p>教科</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分と身近な人々及び地域とのかかわりに関心をもち、適切に行動できるようにする。(生活科) ・校内で「命を守るもの」があることを知る。(生活科) ・生まれた時のことを聞くことにより、生まれたことに感謝し、命を大切にすることをもち。(生活科) | <ul style="list-style-type: none"> ・地域の関係機関や人々は、自然災害に対し様々な協力をして対処してきたことや、今後想定される災害に対し様々な備えをしていることを理解する。(4年社会) | <ul style="list-style-type: none"> ・国土の様子について理解し、自然災害の防止と国民生活とのかかわりについて関心を深めるようにする。(5年社会) ・国や地方公共団体の自然災害に対する政治の取組について理解する。(6年社会) ・気象現象や流水の働きや規則性についての見方や考え方を養う。(5年理科) ・土地のつくりと変化のきまりについての見方や考え方を養う。(6年理科) ・けがの防止や病気の予防について理解し、健康で安全な生活を営む資質・能力を育てる。(5年体育) |
| <p>道徳</p> <ul style="list-style-type: none"> ・A(3)節度・節制 ・B(8)礼儀 ・C(13)家族愛・家庭生活の充実 ・D(17)生命の尊さ | <ul style="list-style-type: none"> ・A(5)希望・勇気・努力と強い意志 ・B(7)感謝 ・C(16)伝統と文化の尊重 ・D(18)生命の尊さ | <ul style="list-style-type: none"> ・A(5)希望・勇気・努力と強い意志 ・B(8)感謝 ・C(14)勤労・公共の精神 ・D(19)生命の尊さ |
| <p>特活</p> <ul style="list-style-type: none"> ・健康で安全な生活態度を形成する。(学級活動) ・避難訓練4回〔火災・地震、授業中・休み時間・積雪時、緊急地震速報音、防火扉通過、予告なし〕(学校行事) | <ul style="list-style-type: none"> ・交通安全教室(学校行事) | |